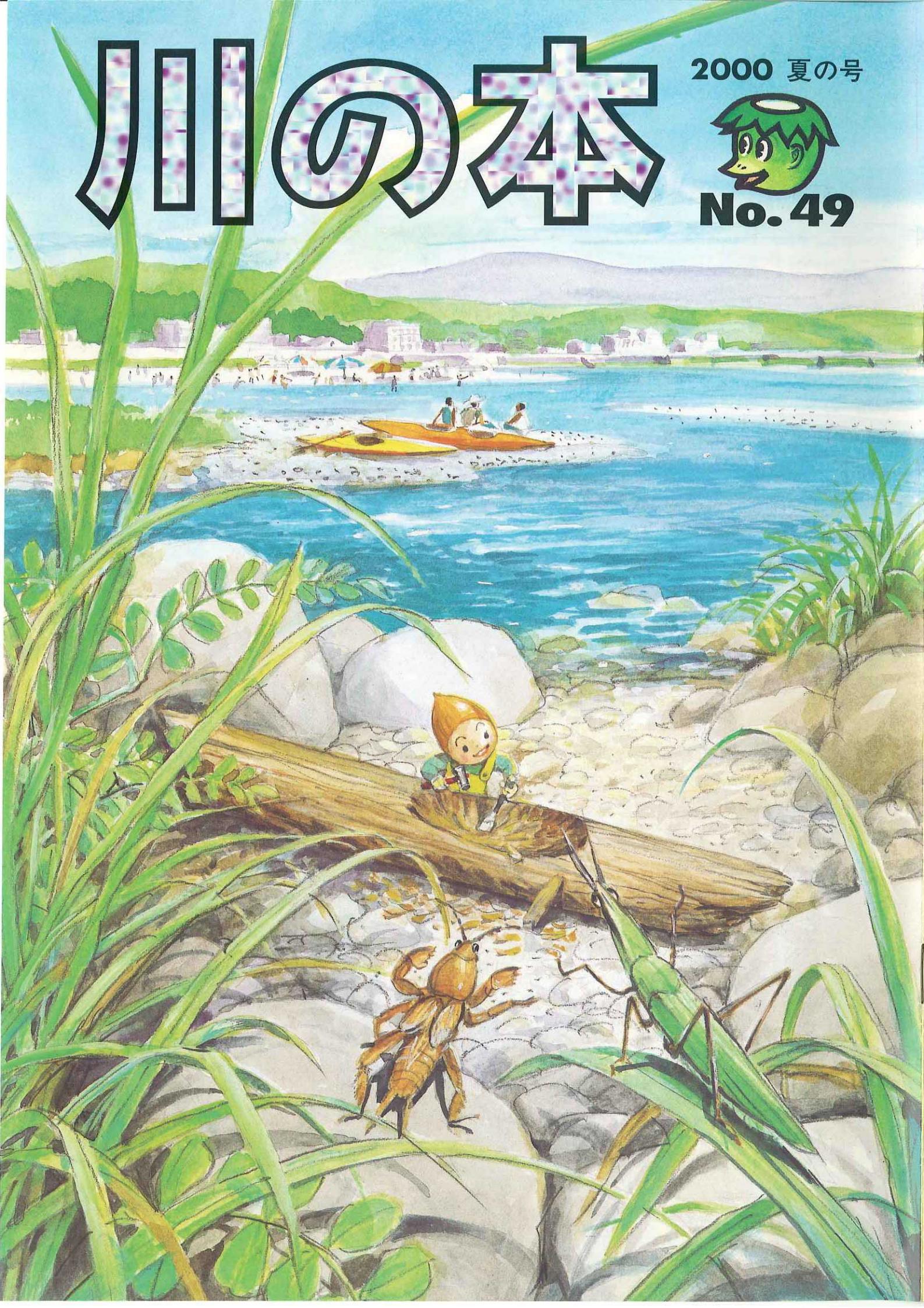


# 川の木

2000 夏の号



# 筑後川と五庄屋どん

(筑後川・伝説再話)

「わしの村では草の根もほりつくし、村ばすてて逃げだす者がおるとよ」「それならまだよかたい、わしの村では、とうとう死人がでたばい」「いまましか、筑後川のたっぷりした流れを見てるだけで引いてくることができんとはのう」

「このままじやあ、このへんの村はぜんめつたい、ここらより高い川上の村から水路ばつくつて、そこから筑後川の水を引くしかなかと」「ばつてん、反対もおこるじやろうし命がけの大仕事たい」

「そげなこといつとれん、藩のお奉行さまもなつとくする計画をつくってこんどこそ水ば引くんじや」

「そうじや、命をかけてもやりぬくたい」「五人の庄屋どんは、今まで何回も計画だおれになつていたこの案をこんどこそやりぬこうと、血判（血をだした指で押した判）の証文までつくり誓いあつたんじや。そして夜もろくろく寝ずに計画づくりにとりかかつた。こつそり川上の村の土地をしらべたりもしたんじや。

ところがじや、ひみつはいつかばれるもんじや。近くの村々にうわざがひろがつた。さあ、そつなるとその村々の庄屋どんたちがだまつてはいない。水を引くつてほんとうか、わしらの村も水にこまつとるばつてん、なかまに入れてほしか」

「自分らだけに水を引くのは許せんばい、わしの村も水がほしか」そこで、しかたなく仲間にすることにした。庄屋どんは全部で十一人にもなつた。これだけ大勢で、ねがいでれば、きっと有馬藩のお殿さまも許可してくださるじやろ。

ところがところが、そうやすやすとは事が運ばない。川上の庄屋どんたちが血相かえてさわぎだしたんじや。「なんばぬかしとる、いくら水がほしかちゆうて、わしらの村の土地をほつてじぶんの水路にするなんぞ許せんばい。土地どうぼうたい」「それだけじやなか、筑後川に大水でもおこれば、その水ば水路からあふれにきまつちよる、まつ先にやられるのはわしらの村たい」「ぜつたい反対じや、木いっぽん草ひとつさわらせんたい」この大反対には藩の重役たちもこまつた。水路ができると水田がふえれば藩

むかし、ほんとうにあつた話じや。

筑後川の中流あたりに生葉というところがある。このあたりの土地は高いと

ころにあつてな、すぐ目の先を流れる筑後川の水を引くことができない。

だからいつも水にはこまつておつた。

ある年のこと、まいにちまいにち日でりがづき、すっかり水がなくなつて

て畠の作物はもちろん道ばたの草までからからに枯れてしまつた。

どうしたものかと、近くの村々から五人の庄屋どんが集まつて頭をかかえてなやんでおつた。

「わしの村では食つものがなく草の根まで食べとるとよ」

筑後川の水路がつくつて、そこから筑後川の水を引くしかなかと

「ばつてん、反対もおこるじやろうし命がけの大仕事たい」

「そげなこといつとれん、藩のお奉行さまもなつとくする計画をつくって

こんどこそ水ば引くんじや」

「そうじや、命をかけてもやりぬくたい」「五人の庄屋どんは、今まで何回も計画だおれになつていたこの案をこんどこそやりぬこうと、血判（血をだした指で押した判）の証文までつくり誓いあつたんじや。そして夜もろくろく寝ずに計画づくりにとりかかつた。こつそり川上の村の土地をしらべたりもしたんじや。

ところがじや、ひみつはいつかばれるもんじや。近くの村々にうわざがひろがつた。さあ、そつなるとその村々の庄屋どんたちがだまつてはいない。水を引くつてほんとうか、わしらの村も水にこまつとるばつてん、なかまに入れてほしか」

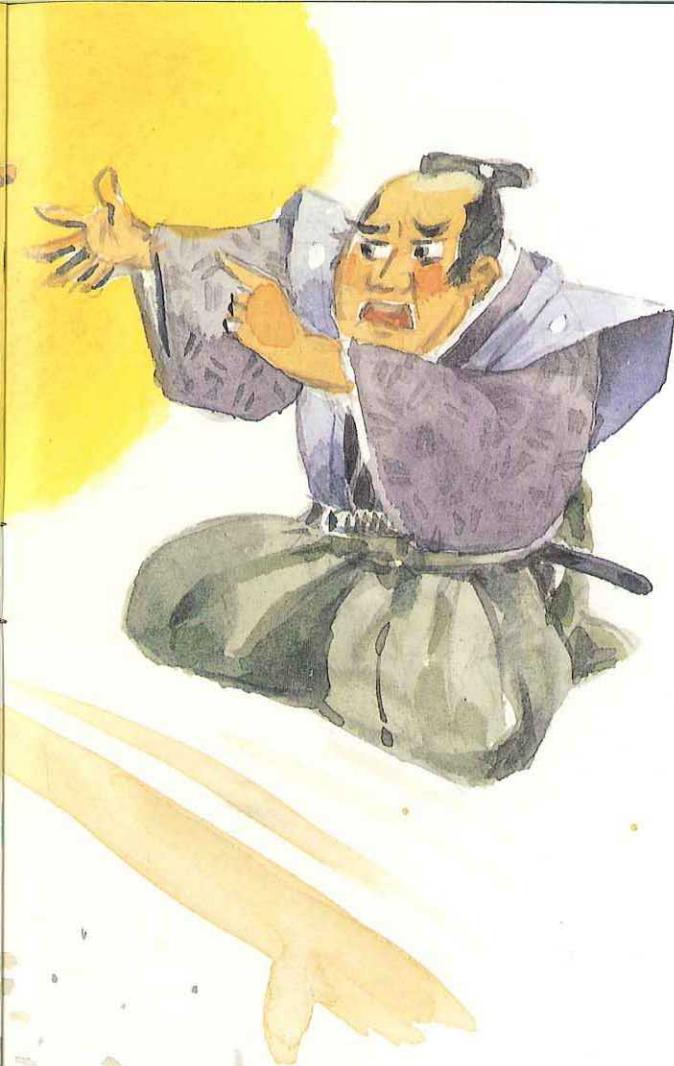
「自分らだけに水を引くのは許せんばい、わしの村も水がほしか」

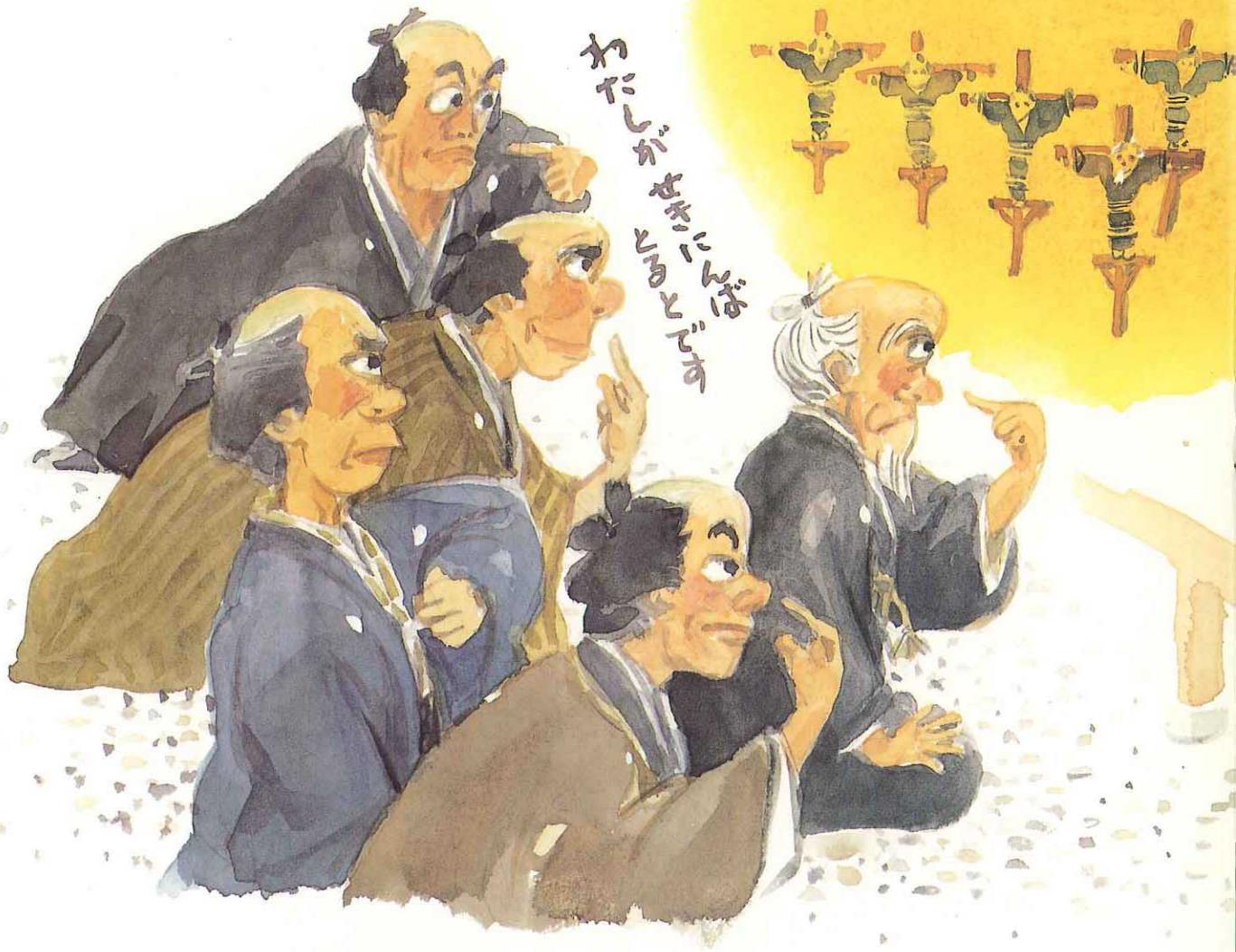
そこで、しかたなく仲間にすることにした。庄屋どんは全部で十一人にもなつた。これだけ大勢で、ねがいでれば、きっと有馬藩のお殿さまも許可してくださるじやろ。

ところがところが、そうやすやすとは事が運ばない。川上の庄屋どんたちが血相かえてさわぎだしたんじや。

「なんばぬかしとる、いくら水がほしかちゆうて、わしらの村の土地をほつてじぶんの水路にするなんぞ許せんばい。土地どうぼうたい」「それだけじやなか、筑後川に大水でもおこれば、その水ば水路からあふれにきまつちよる、まつ先にやられるのはわしらの村たい」「ぜつたい反対じや、木いっぽん草ひとつさわらせんたい」

この大反対には藩の重役たちもこまつた。水路ができると水田がふえれば藩





のためになるが、もししつぱいすれば藩としても損害をうけることになる。  
そこで重役たちは頭の良いお奉行をえらび調査をさせたんじや。

調査を終えたお奉行は、とてもこれだけの大仕事は庄屋だけではやりとげられないと考えた。だいいち川上と川下の村で大げんかがはじまるにきまつてゐるからう。お奉行は藩の重役とそだんのうえ水路づくりは藩の仕事をすることにした。そして川上と川下の庄屋どんたちをよびあつめてけつだんをくだしたんじや。

「まず川上の者にいいわたす。おまえたちの土地はもともと藩の土地じや。水路づくりは藩のためじや、ぜつたい反対してはならぬ、よいな」

「つぎに川下の者にいいわたす。おまえたちの村々に水をひく工事じや、お金がたくさんかかるがぜんぶ自分たちでもつこと。それにもし工事がしつぱいすれば、藩にも川上の村々にもめいわくをかけることになる。その責任は重いぞ。そのときは責任者をはりつけの刑罰にするがどうじや」

これには反対派の庄屋どんたちもおどろいた。あの大きな筑後川に堰をつくるだけでもむづかしい、その上、水路をつくつても川下の村まで水が流れかるどうかわからない。水が土のなかにすいこまれてしまふかもしれないのじやよ。なんせ今までだれひとり経験したことがない大仕事じや。しつぱいしたら殺すと聞けば、だれだつてドキッとする。

そのとき五人の庄屋どんがそろつて前にすすみでた。

「お奉行さま、しつぱいしたら、わしら五人の庄屋が責任をとりもうします。

はりつけでも火あぶりでもかまわんとです。お金もぜんぶわしらがだします。覚悟はできとるとです」

「そうか、その言葉

しかと聞いたぞ、みなのも聞いたであろう、命をかけた五人の庄屋を生かすも殺すも、みんなの協力しだいじや」

そして、まだ工事がはじまつたばかりじやというのに、村の入り口にはざつそく真新しいはりつけ用の柱が五本たてられた。それを見た村人たちは、「庄屋どんを殺すな」を合い言葉に女も子どもも手伝つたんじや。

九州一の筑後川を横切るような堰をつくるには、山から何十万個もの石を運んでこなければならぬ。大きな石など一つ運ぶのに二百人の人が二日もかかつたということじや。

「どうか成功しますように、神さまおたすけくださいませ」と。

庄屋どんのおみさんなんか、じぶんの髪の毛をバサリ切つてな、それを神社に捧げて祈つたそうじや。お奉行もあちこちから工事の手伝いを集めてくれた。反対していた村々の人たちまで手伝いにやつてきて、四万人もの人が加わつた。みんなが必死でがんばつた。そして、いよいよ水を流す日がやつてきた。堰の水門が開かれると、水はさらさらと水路をはしり、やがてかわききった生葉の村々にたどりついたんじやよ。

五人の庄屋どんの命をかけた願いがかなつたのじや。

はたらいた人みんなが「ばんざい、ばんざあい」とさけびながら、おどりあがつてよろこんだそうじや。もちろん村の入り口にたてられていた、はりつけの五本の柱もお奉行の命令で焼き捨てられた。

それからというものは、生葉の地域だけでなく水路のまわりには水田がた



## 筑後川にいどんで土地をいかす

五庄屋のお話しさは、今からほぼ三百年余りむかし、江戸時代のことですが、この時期は大開発時代といわれるほど、日本の国土に水田がふえた時代です。江戸幕府も各地の大名もこぞつて土地開発に力をそそぎました。しかし水がたっぷりなければ水田を開くことはできません。荒れ地を水田にかえるには、大きな川から水を引くしかないので。ポンプなどない時代、このお話をのように高い土地に水を引くには、より高い上流から水路をほつてくるしかありませんでした。

お話に出てくる生葉というところは現在の福岡県浮葉郡の吉井町から田主丸町あたり一帯のことで、みどりと清流の穀倉地帯となっています。かつて日照りが続けば、からからに干上がった荒れ地をいまは想像すらできません。そこから10キロメートルほど上流に大石堰があります。ながい年月の間には、何度も洪水でこわれたこともありました。現在の堰は近代的に復旧されたもので昔の姿ではありませんが、復旧工事のさい、あらためて三百年も以前につくられた堰や水門が、いかにrippaであつたかが証明されたということです。

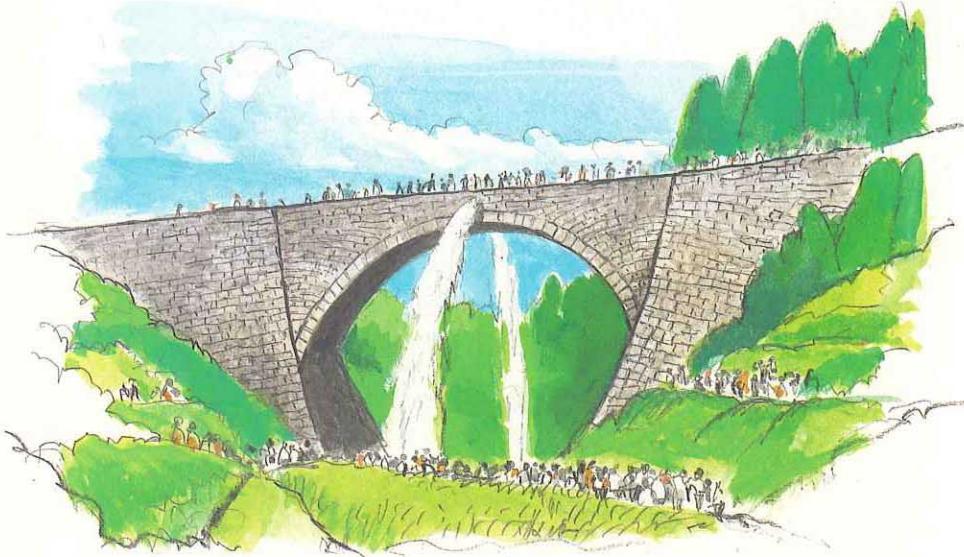
地域の人々は、命をかけた五人の庄屋どんへの感謝と尊敬の気持ちを忘れないうように、近くに長野水神社をたてて五人の庄屋どんをまつています。

現在、筑後川には約30の堰がありますが、お話を大石堰は山田堰・恵利堰と並んで筑後川の三大堰とよばれています。筑後川の長さは143キロメートル、流域面積は2,860平方キロメートル。熊本・大分・福岡・佐賀の四県を流れ有明海に注ぐ九州一大河です。



# 文化をつたえる橋

橋には、人の暮らしと川とのかかわりがぎざぎざあります。ここでは、そんな橋のなかから三つばかりしようかいします。



つうじゆんばし  
通潤橋

熊本県矢部の農地は、深い谷にとりかこまれ水がとぼしい土地でした。この農地に水を送る水路として、江戸時代に緑川の支流、五老ヶ滝川にかけられた石橋です。昭和39年ごろまでこの地の水田には欠かせない働きをしてきました。日本の石橋の傑作の一つで、現在は重要文化財としてたいせつに保存されています。年一回の放水は、水を通す管内のどろそうじのためおこなわれるのですが、ごうかいに水をふきだす姿を見ようと大ぜいの見物客があります。



ちんかばし  
沈下橋

四国の四方十川にある沈下橋は、主なものだけでも32本もあります。この橋の歴史はそれほど古くはなく昭和時代につくられたものです。コンクリートで頑丈につくられています。装飾など無駄なものがいっさいなく、らんかんまでりません。洪水などで増水したとき水のなかへ沈んでも流れないように、工夫された橋です。今まで何度も洪水にあい水に沈みましたがあがれることなく、地域の人々の暮らしを守りつづけてきた橋です。

たまるばし  
田丸橋

屋根つきの橋は、神社などではいくつかあります。が、愛媛県の麓川にのこるこの橋は、農道としてつくられためずらしい橋です。川をはさんで住む近くの人たちの集いの場所になったり、農作業のあいま、ひとやすみしたり、雨宿りの場所になるなど、人々の暮らしに密接にむすびついた橋なのです。かつては、この川筋にはこのような橋は10本ほどもあったそうですが、洪水などで流れました。田丸橋は地元の人たちで再建され保存されているものです。



# 川べにすむ小どうぶつたち (両生類・は虫類)

「きやあ きもちわるい」「あーらかわいい」「かつこいいじゃん」  
きみはどうおもう。でもここにしようかいする小さなどうぶつたちは  
みんなおとなしいんだ。水べで見つけてもいじめないでね。

## カスミサンショウウオ

全長10センチくらい。  
ふだん、ひるまは水辺のヤブの石の下など  
陸土にかくれてすんでいる。  
卵は水の中に生む。

## カジカガエル

体長は3~7センチくらい。  
本州、四国、九州の山の中の  
川はばのひろいところがすくだ。  
ヒュルル ヒュルル とふえのような  
高い声でなく。

## トノサマガエル

池や水田、河川敷の草むらがすき。  
日本の代表的なカエルだ。  
なくときは両方のほっぺたをふくらませてなく。



## ニホンアマガエル

雨が降る前にさかんになく。  
水田や河川敷などの草や木の葉に  
吸盤ではりついていたりする。

## カナヘビ

全長16~22センチくらいもあるが  
その2/3は尾だ。  
土堤などの草むらがすくだ。

## サワガニ

川のはば25ミリくらい。  
川の上流のきれいな水がすき。  
九州より北では、ま水にしか  
すまない、ただ一種のカニだ。

## イシガメ

体長は18センチくらい。  
本州、四国、九州にだけいるカメ。  
池や川など、ま水の中にすむ。



川へ行くとき これだけは守ってほしい  
・一人ではぜったい行かない。・友達とでか  
けるときも大人の人といっしょに行く。・人  
のいないところでは遊ばない。・行先はかな  
らずいって行く。・人のいるところで石をな  
げない。・おやつやおべんとうのあとかたづ  
けはきちんとし、ぜったいちらかさない。  
・切れた釣り糸なども捨てないでもちかえる。





### オオサンショウウオ

にっぽんのオオサンショウウオは、  
やまおくのきれいな水の中にしかすまない。  
サンショウウオのなかまでは、せかい一おおきく  
全長1.2メートルにもなるものもいる。  
さいきん数がへり、ぜつめつがしんぱいされていて  
特別天然記念物に指定されている。

### アカハライモリ

全長10センチくらい。  
体にうろこがなく  
いつもしめっている。  
かみついたりしない  
おとなしい動物だ。



### ニホントカゲ

全長は20センチくらい。  
尾をつかまえられると  
自分で尾を切って逃げるが  
またはえてくる。

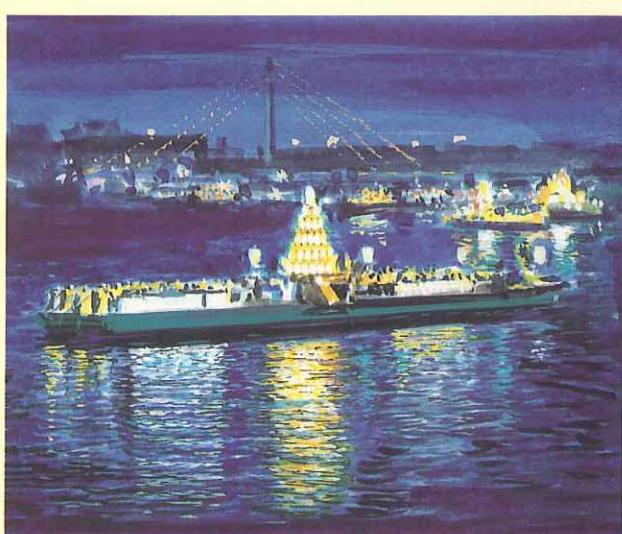


### シマヘビ

全長70~130センチくらい。  
ドクはないが、わりと性格はあらい。  
こうふんすると尾をはげしくふる。



## 川の伝統行事



く  
大祭です。

6時半過ぎから、いよいよ天神祭りのクライマックス船渡御に移ります。コンコンチキチン、コンチキチンかねや太鼓もにぎやかに、神幸船を中心にして、数え切れないほどの提灯を着けた船、舞台船では神楽がまい、河内音頭でにぎやかな船等、それぞれに趣向をこらした130余隻をこえる大船

団が大川の天神橋と飛羽舟の間をまわります。

川によつて栄えた水の都を誇る大阪商人の心意気が華ひら

### 天神祭

(大阪市北区)

天満宮／7月24日～25日

## かわ 川のビオトープづくり

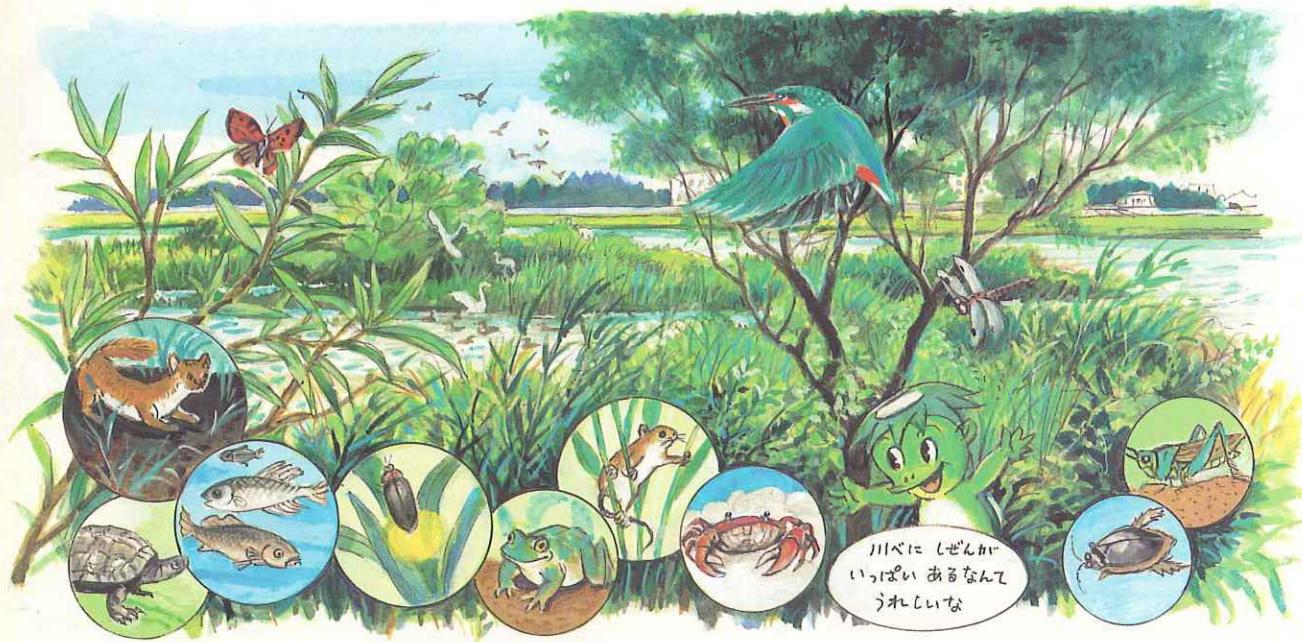
魚や鳥、ねずみ、いたち、こんちゅう、などの動物たち、それに草や木などの植物が、共にあつまって、いごこちよくくらせる水辺の自然環境のことをビオトープといいます。

川はわたしたちのいちばん身じかにある自然です。その川からもいつのまにか自然が少なくなっています。これではいけない。川の自然をとりもどし、動植物がいきいきとくらせる環境を創ろうとビオトープづくりの取り組みが多くの川で行われるようになりました。

川は、台風や梅雨どきに、しばしば洪水をおこすことがあります。こうした洪水から人の命や財産をまもるために、

堤防を頑丈にしたり、水の流れをよくしたりする治水という工事がひつようです。だからといって川のまわりをコンクリートでかためただけでは、川の自然がこわれてしまいます。そこで今ではしっかりと治水をしながら、できるだけ自然にちかい環境をつくる努力が進められているのです。草がおいしげって手入れがまったくできていないような河川敷を見かけることがあるかもしれません、わざと人の手でつくったビオトープかもしれません。

川は上流中流下流のみどりと生きものたちをむすぶ、たいせつな働きもしているのです。



## 河川愛護月間

7月1日→31日

8月1日は水の日です

### 河川環境管理財団は

みんなに愛される川であるように、こんな仕事をしています。

- \*よりよい水辺のプランニング
- \*楽しく安全に遊べる川づくり
- \*川をきれいに、川を愛する心を育ぐくむ運動
- \*未来の水辺を考えた調査や研究
- \*せせらぎ・ふれあい基金

●この本は再生紙を使用しています。



財団法人 河川環境管理財団

Foundation of River & Watershed Environment Management

(〒104-0042) 東京都中央区入船1丁目9番12号

TEL. (03)3297-2600(代表)

URL: <http://www.kasen.or.jp>